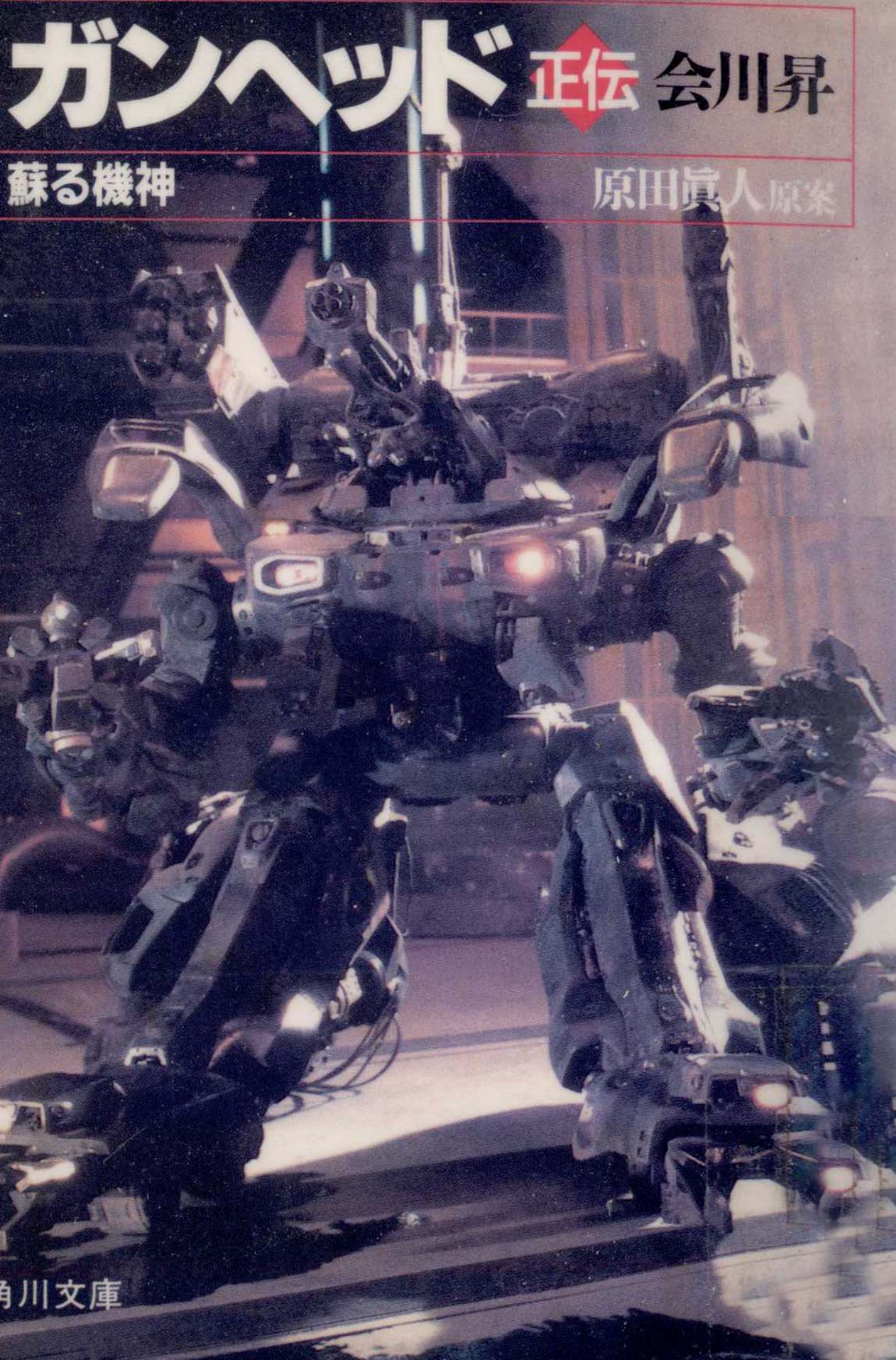




ガンヘッド



会川昇

蘇る機神

原田真人原案

角川文庫

ガンヘッド^{せい でん}正伝

はらだ まさと
原田真人＝原案

あいかわしろう
会川昇＝著



角川文庫 7572

平成元年七月一日 初版発行
平成元年七月十日 再版発行

発行者——**角川春樹**

発行所——株式会社**角川書店**

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)八一七―八四五―

営業部(〇三)八一七―八五二―

テ一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ガンヘッド正伝

蘇る機神

原田真人＝原案

会川昇＝著



角川文庫 7572

お断り

本作は平成元年七月に、全国東宝系で公開される超大作映画『ガンヘッド』のノベライズに当たります。小説化に当たり、各種の設定、特に年代設定に於て、映画本篇と変更した点が多在りますが、これは小説という表現媒体に合わせたの変更ですのでご理解下さい。

既に角川スニーカー文庫より、『ガンヘッド1 銀光の狂獣』『ガンヘッド2 朱き荒野の狩人』が発売されており、また来月には『ガンヘッド3』が新発売となります。本作『ガンヘッド正伝』は、前記三冊の続編にあたる構成をとっておりますが、本作のみでも独立してお楽しみいただけるよう配慮いたしました。これを機に、他の三冊にも目を通していただければ、作者としてこれに勝る幸せはありません。

最後に、「小説ガンヘッド」をこうした形にすることを快く許可して下さった、サンライズ、東宝、角川書店の皆様、また原田真人監督に深く感謝いたします。

それではどうぞ、お楽しみ下さい。

時は、西暦二九四五年……

目次

1	人工島カイロン	九
2	ファイアドロイド	六
3	ムスリムとバンディッツ	一〇三
4	サージェントM-5R	一五
5	神話の時代	二〇三
	あとがき	二六五

キャラクター・デザイン
イラストレーション
菊池 通隆
麻宮 騎亜

かつて地球に七〇億の人類個体が存在していたという。
そしていま、

1 人工島カイロン

「聞こえたか」

最大にすれば、天井全面が殆ど太陽光と同じ光線を放射することができるその部屋の照明設備は、しかしいま最低に保たれていた。最低の目盛りには「ML」と記されている。ムーン、月光を意味する。最大値の場所には「SL」だ。

月光よりは若干明るい程度の青味がかった光の下に、五名の男女が集まっている。どの顔も緊張感に包まれている。

年長で角張った顔の男が発した問いかけに、対面に立つ若い女が答えた。

「来たの？ 感じなかったわ」

女のハッキリと見開かれた瞳孔に、彼らが囲んでいるデスクに取り付けられたモニターの光が反射し、美しいブラウンが一瞬間に浮かび上がる。わずかなウェーブが襟元にまで達しそこで思いきりよく断ち切られている金髪も。

他の男女も金髪の女と同じで、恐怖を露にして周囲を窺う。だが少なくとも今はどんな異常

音も聞き取ることは出来なかった。

彼らは猫に追いつめられた鼠ねずみの表情で、年長の男の顔を見た。男はどうやらリーダーらしく、恐怖感を押し殺して「確かに聞こえた、何かが近付いている」と告げた。

「だって探知機センサーは作動していない」

若く、子供と言ってもいい印象の、背だけは高い男が早口に言った。大半のメンバーは彼の言葉を正確には理解しなかったが（彼の使う汎用語はんようごには、ひどい東側なまりがあったのだ）探知機センサーという単語だけは聞き取ることが出来た。

誰よりもはやく、金髪の女が球状モニターに手をかざした。手をかざすことで、モニターの発する微弱な情報電波を吸収し、デジタルなそれを脳で図形化して理解することが出来るのだ。モニターと便宜べんぎ的に呼んでいるだけで、その球体そのものは文字図形などを表示したりはしない。電磁波の形で、自分の情報を放出するだけだ。普通の人間がそのデータを受け取るためには、金髪の女以外がいまそうやっているように、自分の手元に置かれた鏡面に映るデータを「読む」しかない。文字どおりに。

しかし金髪の女は違う。彼女は文字情報に一度還元せず脳裏に直接映像を結ぶことが出来るようだ。こうした能力を持つ世代を「サイバネティック・チャイルド」と呼称するが、その詳細については後に譲ろう。

彼女は目を閉じて、球状が放つデータをじっと検討しているようだった。

「どうだ、ニム」

リーダーの隣に構えた、痩^やせた男が尋ねた。彼の目は端^{はな}から鏡面ではなく、ニムに向いていた。自分でデータをあらためるつもりはないらしい。

ニム、と呼ばれた金髪の女は突然目を開けると、

「駄目ね。だけどいくつかの探知機が作動していない」

「何と何だ」リーダーが慌^{あわ}てて尋ねる。彼も自分の眼前にある鏡面で、データをいちいちチェ

ックしていたのだが、彼の操作速度ではまだ二つめの探知機を確認しただけだったからだ。

「感^{プレッシャー}圧と振動。どちらも故障気味ではあったけれど」

ニムの答えはリーダーの焦りを増すだけだった。沈着冷静な態度は既に消えている。

「どうして自動的に修復していないんだ」

「忘れたの？」ニムは諦^{あきら}め顔になってリーダーを見返した。「命令は自分で下す。そう言って

AIのプログラムから自動修復機能を取り外させたのは……」

「ああ、もういい」

リーダーの顔がぶうつと膨^{ふく}らんで、顔のえらが余計に外に張り出した。

「問題はどうしてもこの場所が知れたかだ」

「まだ敵の侵入と決まったわけじゃないわ」

ニムよりも年長の、こちらは髪の前半分を黒に、後ろ半分を紫に染めた色黒の女性が投げ遣^や

りな雰囲気ふんいきでそう言った。「本当に只ただの故障かも知れない」

「すぐに判るさ、ライラ」リーダーよりも先に、瘦やせた男がか細い声で言った。その視線は誰も見ていない。さっきまでニムを見ていたが、今は宙をさまよっている。誰とも視線を合わせたくないというように。「この建物は二五〇階建。敵が侵入できるポイントは一階の入口だけ。だが昇降機エレベーターを使おうと階段を使おうと一〇〇階を越えたところで仕掛けてあるカメラが作動するし、この階に入れば迎撃銃げいげきじゆうが回転し出す。——カメラは何も捉えていないんだろう、ニム」

「自分の目で確認すればいいわ、ダイ。それにリーダーも、他のみんなも」

ニムが手を通して、「思念」を球状に送り込んだ。それに反応した球状は一〇〇階を中心に十数か所に仕掛けてある監視カメラの映像を、天井近くに次々と投射した。

どのホログラフ映像も、平常と変わらぬ単調なものだ。通路を浮遊するカプセルカメラの映像は、円筒形の通路をえんえんと映し出すだけである。白い壁のところどころには「**教室」と表示が見える。かつてこの惑星上で最高学府であったこの建物も、もはや学生を擁ようさなくなつて二〇〇年を数えている。硬プラスチック建材はその売り込み文句通りに五〇〇年経つても全く変質しなかったが、代わりにその破壊に手間取るといふ難点があった。この建物が放置されている原因は、だがそれだけではない。

窓外から建物の一階付近、地上を見おろしている映像があった。

地表は舗装された鉛色の広場で、そこから無数の道路が周囲へと走っていた。この学府を中



心に設計された一種の「学術都市」であるこの街は、他にも二〇〇階級のビルディングが立ち並び、放射状の道路以外にも、透明なチューブ通路が、ビルからビルへと空中で結んでいる。

しかし実際にカメラに映し出されたのは、醜く溶けた舗装道路、爆発によって生じた無数のクレーター、むき出しになった挙げ句灼け焦げさせられた赤黒い大地。ビルディングも立つには立っているがどれも表面は灼けただれたままで、いくつかは中程からポッキリと折れてしまっている。透明なチューブ通路もきちんとビルからビルに届いているものは殆どない。大半は空中で途絶えている。

かつてとてつもない熱量の爆発が、この建物から数キロ先で発生し、街全体を崩壊させたことを、その映像は物語っていた。クレーターは落下した瓦礫や、設置されていて暴発した種々の兵器が原因である。

それは明らかに「核兵器」を連想させる映像だった。しかも決して古い破壊ではない。

そうだとすれば、当然憂慮されるべきは放射能汚染であるが、部屋に集まった男女は一人として放射能防護服など身につけてはいない。むしろ軽装と言った方がいだろう。誰もが半袖のゴワゴワとしたジャケットに、肌^{はだ}にフィットしたパンツを穿き、ジャケットの下は素肌だった。ジャケットにはいくつもポケットがあり、そこには色々と収納されているようだ。リーダーの男のポケットは特に大きく膨らんでいた。

彼らはどうやら限定核戦争によって死に絶えた街にある建物の、その一郭^{いっかく}で会議を開いてい

たらしい。その議事進行を止めた謎なぞの物音については、しかし映像は何も語ってはいなかった。「ご満足ですか」

ニムが一同を見渡した。リーダーはばつが悪そうに、

「どうやら私の聞き違いだったらしい。どうも……最近いつも監視されているようで、ノイロ―ゼ気味なんだ」

肌の黒い女――ライラがうなずいて口を挟んだ。

『ステーション』もここが私たちのたまり場になっていることは知っているでしょうけれど、別に違法じゃないし、無理な取調べは出来ないはずよ。それに最短距離の端末『プルート』は潰つぶされたばかりだし」

その言葉に一同は大きく賛同し、やっとホッとした空気が場に流れた。

「では本来の議題に戻ろう」

リーダーは改めて、球状モニターに向き直った。少し大きくなった声が、広い部屋に通る。だが反響はない。壁が全すべての音を吸収する素材になっている。

ここは元々、学府の会議室として使われていた部屋で、その為に球状モニターの様な精度の高いAI（人工知能。非ノイマン系ニューロコンピュ―タを指す。正確にはAIとは呼べない）や、いくつかの便利な備品が用意されていた。ここに集まったメンバーの中でこの学府に学んだ経験のある者はもちろん一人もいなかったが、そんな訳で自然とこの部屋が用いられていた。AIは本来、ステーション端末に直結しそのデ